

八重山に縁を得て六十一年

中西 喜彦



昭和三十九年七月、鹿児島大学入来牧場新設予定地の測量のために、八重山に入山しました。大学では畜産学科が新設されたのを機に、鹿児島高等農林学校から引き継いだ種子島牧場（四百五十ヘクタール）を入来に移動新設する計画がありました。戦後、外地から引き揚げ入植し、開拓後日本経済の発展とともに離農された方々の跡地（農家二十二戸の農地約百ヘクタール及び国有林五十ヘクタール）を確認するための測定です。ちょうど八重山の山頂に位置し、標高約四百五十メートルから五百十七メートルの東南向きの傾斜地です。コンパス測量法で、約一週間泊りがけ

で三百三十三か所の測量点を作って面積の確定を行いました。これは、背丈の二倍ほどのススキを刈り取って道を作る仮払いを行った後、巻き尺で測った地点に棒を立て、測定者がコンパスを用いて角度や距離を測定するという3人がかりで移動しながら行う測量法です。入山して一番驚いたのは、入来役場の方により仮払いは行われていましたが、圧倒的にススキが群立している状況だったことです。このように、開場まで四年、土づくり十年、草づくり十年、牛づくり十年、その後の畜産バイオテクノロジー技術を用いた牛の受精卵移植や異種移植用ミニブタの開発の研究のためにと、三十八年入来牧場に続きました。

退職後、平成二十一年九月に第七回入来薪能が行われました。その年の三月、鹿児島謡曲連合会の会報に入来薪能の意義などを書い

ていただくために、入来院ご夫妻の元を訪ねました。入来院家を訪問した際に、はじめて茅葺門をくぐることになり、このような萱の活用方法があるのだと感心しました。茅葺門は入来町の文化財として登録されております。また、もう一つの文化財である「入来文書」は、故・入来院貞子さんが解説しておられ、日本の封建社会の解析ツールとなっています。その主な内容は、日本の武士は一所懸命に地域と密接な関係を持つのに対して、西洋の騎士は金銭による傭兵集団であるということです。私はこの文書の手解きを受けたことにより、日本と西洋社会の考え方の具体的な違いを知ることができました。

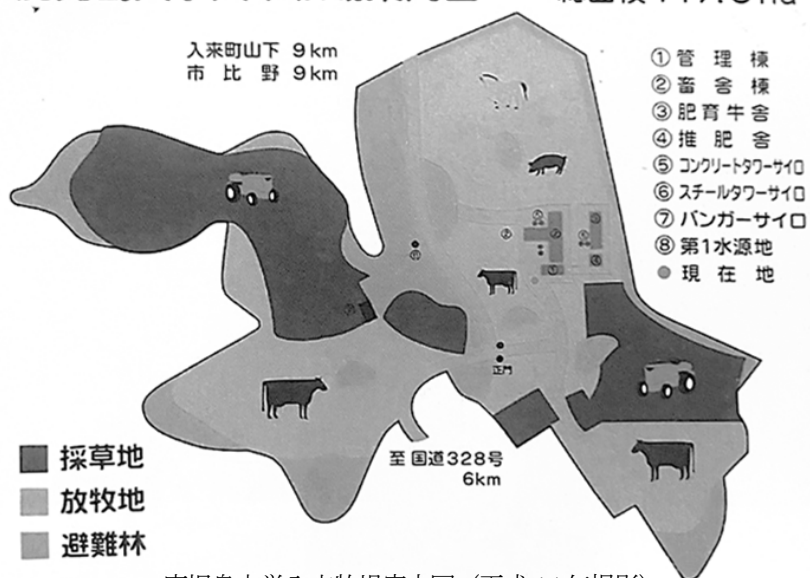
このように、私は六十一年にわたる入来とご縁のなかで、生きものとしての生き方を八重山の山頂にある牧場で学び、国としての在り方を八重山の麓で学ばせていただきました。



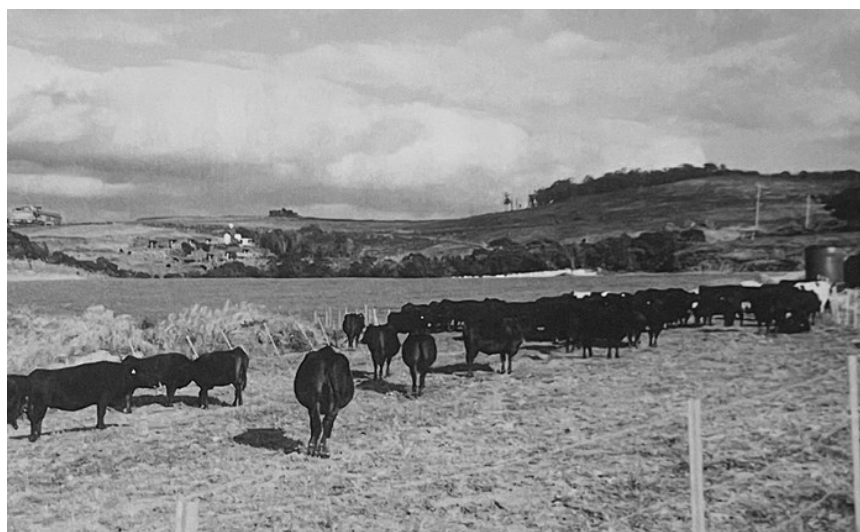
コンパス測量時の休憩

鹿児島大学入来牧場案内図

総面積 147.8 ha



鹿児島大学入来牧場案内図（平成14年撮影）



入来牧場の様子（平成12年撮影）

た。この入来とのご縁に深く感謝しております。

以前から、私は入来院家が鎌倉時代から長く続いている理由について筆者なりに考えていました。昨年、日本国史学会会長だった故・田中英道氏が日本人の起源を求めて沖縄県の島々を訪問されました。そのなかで、八重山列島が地勢的に八重に重なり合っていないこととに注目し、ヘブライ語の「ヤーベ（尊いもの）」という意味が呼び名の由来ではないかと推測されていました。それを聞いて、入来の八重山も同じような意味であると感じました。その尊さは水が枯れない豊かな面にあると思います。実際に八重山は、鹿児島市の甲突川や旧川内川の源流にもなっています。入来院家が六百五十年の歴史を支えている理由は、前述の武士階級と住民の密接な関係に加えて、尊い山に囲まれていることも要因の

一つではないでしょうか。豊富な水源と史跡に恵まれた入来がますます繁栄することを祈念しております。

（鹿児島謡曲連合会前会長、鹿児島大学
名誉教授、炉ばたセイ談会会長）

